第 15 回 Asia Traveling Fellowship　－インド・マレーシア訪問記－

15th Asia Traveling Fellowship -Visiting India and Malaysia

清水孝彬　京大大学院整形
山田勝久　北大大学院整形

この度 4 年ぶりの Asia Traveling Fellowship として，インドとマレーシアを訪問する貴重な機会をいただきましたので，ご報告させていただきます.

【インド：Ganga hospital】

2023 年 9 月 5 日から 1 週間、 インドの Ganga Hospital を訪問しました。日本からシンガポールで乗り継ぎ、さらに 4 時間程のフライトでコインバトールに到着しました。ビジネスビザでなく旅行者ビザで入国する場合は、税関で注意が必要です。安全のためには事前にビジネスビザを取得することをお勧めします。到着したその足で Prof. Rajasekaran (Raja)との食事会に向かい、熱い歓待を受けました。町一番の高級ホテルに滞在させて頂いたため、思い描いていたインドの雑踏よりはラグジュアリーな滞在となりました。コインバトールでは先進的な医療が提供され、テック系の産業も盛んでインドで最も安全でクリーンな町であるとのことでした。とはいえ病院から一歩外に出るとカオスが広がっており、特に車の交通状況は最悪で、交通外傷が多発しているという事も十分納得です。

Ganga Hospital は Raja 一族が運営する整形外科を中心とした private hospital です。年間 3500 件の脊椎手術を行っており、インドでも有数の脊椎センターで、この南インドまで、アフリカやモルジブからも脊椎患者が訪れていました。Prof. Raja, Dr. Ajoy ともう一人の consultant surgeon 3 名の下、約 10 名の Spine Fellow、30 名程度のレジデントが一日 10-15 件程度の脊椎手術をこなしていました。インドの外科医は極めてハードワーカーであるというのは自他ともに認めるところのようで、大きな deformity の手術がある日は AM5:00 から手術が始まっている日もありました。日本の政策（働き方改革）に不安を感じざるを得ませんでした。Prof. Raja は ISSLS と AOSpine の past chairman であり、世界的に有名な脊椎外科医です（写真 1)。研究でも多くの業績を残されており、フェローの言葉を借りるなら“Father of spine surgery in India”です。最近では、基礎研究を専門的に行う研究施設も併設されて、専任の PhD 研究者達が椎間板変性のプロテオミクス解析や細菌研究を行っていました。資金力の潤沢さをひしひしと感じました。

1 週間のスケジュールとしては、手術見学日と外来見学日が交互にあり、合間で前述の研究施設やリハビリ施設の見学に行きました。先天性側彎や脊椎カリエス後の後弯変形の矯正手術などの変形に加えて、変性疾患、外傷、感染、とすべての領域を網羅している印象でした。Prof. Raja 自身も“自分に特定の専門領域はなく、すべてやる”とおっしゃっていま

した。なんと、THA・TKA も自ら執刀していました。一人の患者を整形外科的観点から全人的に診療する、卓越した知識と技能の持ち主であると感じました。それほどの能力を持ちながらも、なお新しいものを取り入れる努力もされており、世界中の有名な脊椎外科医を招いてライブサージェリーを開くということを定期的にやってきたそうです。特に頸椎外科においては日本に大きなリスペクトを持たれており、我々としては非常に誇らしく、日本人脊椎外科医の先人方の存在に深く感謝しました。運よく頸椎椎弓形成術を執刀する機会を与えてもらいました。無事手術が終わった時にはほっと胸を撫でおろしました。

食事は基本的にカレーでした。カレーに詳しくはないのですが様々なスパイスを駆使されて作られているのか、一つとして同じ味のカレーはなく毎回新鮮な味を堪能しました。帰国後しばらくは現地の味が忘れられず、インドカレー店を探し求めることになります。最終日は Prof. Raja が予約してくれた南インドのリゾート（Dvara Resort）にパートナーの山田先生と訪問しました。おそらく日本人観光客が訪れたことのない現地のリゾート地で二人で不思議な夜を過ごしました。

JSSR のトラベリングフェローということで、おそらくこれ以上ない手厚い歓迎を受けたことに感謝すると同時に、先方が満足のいくコミュニケーションがとれたかどうか不安で、より一層の英語力の向上が求められると痛感しました。

写真１：Prof. Raja, Ajoy とフェロー達と共に（Prof. Raja 自宅にて）

【マレーシア：Malaya University】

2023 年 11 月 21 日から 1 週間、クアラルンプールの University Malaya Medical Centre を訪問しました。本施設では、Prof. Kwan を中心とした 5 名のスタッフが Spine team として在籍しており、側弯症を中心とした治療を行っておりました。今回は土曜日も含めて計 7 件の側弯症後方矯正固定術を見学させていただきました（当初は 9 件の予定でした）。手術室は 1 部屋であり、側弯症手術が 1 日に朝から縦 3 件で予定されておりま

した。また、側弯症専門外来の日は定期の側弯症手術が午後 5 時入室で、その後に変性疾患の手術も予定されていました。若手のスタッフに手術日は何時に帰るのか尋ねたところ、”It’s a good question.”と返答があったのが印象的でした。

側弯症手術は 2 名の術者が両側より同時に展開し、それぞれの術者が適宜 C アームにて確認しつつフリーハンドでどんどん椎弓根スクリューを挿入し、流れるようなスピードで手術が進んでいました。基本的に骨切りは Grade1 の下関節突起の切除のみであり、コストの関係から椎弓根スクリューは頭尾側端には 2 椎体ずつ 4 本、他は 1 椎体毎スキップして挿入していました。展開も最小限でスクリューが挿入されており、出血は非常に少なくいずれも 2 時間弱で手術が終えられていました。閉創も非常に大事にしており、手術は展開から閉創まで Prof.Kwan と第 2 術者（Prof. Chris or Chiu）が行っていました。低侵襲、短時間の手術をチームで体系的に行っており、側弯症術後 3 日でほとんどの患者が退院しているということを聞きとても驚きました。

手術の合間には各先生方からレクチャーがあり、彼らの体系的な側弯症の治療戦略を教えていただきました。術前・術中に最上位および最下位固定椎の傾きを詳細に検討し、全体のバランスを整えることを入念に計画されておりました。蓄積したデータを解析し、得られた知見から治療戦略を立て論文化し、その戦略をチーム内で共有し実際の診療・手術において実践して還元するというプロセスが、Prof. Kwan を中心としたチームで体系的に行われていることになによりも感銘を受けました。Ganga Hospital でも思いましたが、月曜から土曜日まで朝から遅くまで診療しているだけでなく、研究・学会発表、そして論文を多く出しており、一体いつ論文を書いているのかが不思議でたまりませんでした。日本では働き方改革が進められていますが、彼らの働き方を見ていろいろな意味で考えさせられました。

この忙しい中でも、大変ありがたいことに毎日のようにもてなしていただきました。お腹が空く暇がないほどいろいろな美味しいお店に連れて行っていただき、サルやホタルや光るプランクトン？を見られる不思議なツアーにも連れて行っていただきました。勉強になったことはもちろんのこと、様々な見聞を深めることで視野が広がり、また Malaya University の素晴らしい先生方と友好を深めることができたことがなによりの収穫であったと思います。

写真 2：Malaya University の Spine team と共に

【おわりに】

いずれの施設においても多忙な中我々のために多くの時間を割いて歓待していただき、感謝しかありません。今後の日本・アジアの脊椎外科の交流と発展に貢献することで恩返ししていきたいと思います。このような貴重な機会をいただけましたことを、日本脊椎脊髄病学会関係者の皆様、また同僚の先生方および家族に感謝を申し上げます。